

目が腫れている。スウェットの袖でごしごし擦ったのもあつて赤くなっている。毎日半日は寝ているはずなのに、くまが消えない。目の下は色が濃くなつて行くばかりだ。洗面台にため息をこぼしながら歯磨きと洗顔を済ませ、ダイニングテーブルについた。コーヒーのおいがる。ミルクと砂糖は多めがいい。もう苦い思いなんてしたくないのだ。人生も、味も、全てにおいて。

この世界が仮想現実だとするのなら、どうしてわざわざ苦しい思いをしなければならないのだろうか。よつて、この世の陰謀論は全て否定したい。本当に権力者に支配されてデイストピアになりつつあるのなら、もつと虚ろで味のない世界になつては行かぬ。けど、そうじゃない。こんな社会でも輝きを放つ人は一定数いるし、俗に言う幸せな家庭を持つ人もいる。なんだかんだ言いながらみんな結婚して子育てをして、次の世代へと繋げようとしている。デイストピアなら、まず女は産む機械になる。全てが無機質と化し、食事は一日の半分の栄養が凝縮されたバーが二本のみになる。そして私のこの過ちは起こらなかつたし、その余韻で日々泣きじゃくることもない。

甘すぎるコーヒーを飲み干して、もう一度寝室に戻つ

た。ぐつたりとして、真つ白な天井を見上げる。ここが病院だつたらよかつたのに。精神を患っている人は病識がないらしい。かもしれない、が無い人こそ眞の疾患者なのだ。レースカーテンが半開きになつて、どんよりとした曇り空が見えている。雨が降りそうで降らない。雨音を聴きたい気分だから、降つてもいいよと空に投げかけてみる。もちろん返事はない。土砂降りの中自転車を漕いで帰っていた私は、間違いなく純粋で、正しかった。大声で歌いながら、口に入ってくる雨の味におかしくなりながら、ちよつと滑りやすいコンクリートの地面を颯と駆けたあの頃が、眩しい。

ベッドの上で大の字になりながら、何をしようかと考える。けど、別にやりたいことは何も無い。ただこうして寝つ転がつていたい。何も考えずにいたい。脳内のハムスターが思考の滑車を忙しく回している。そんなに走つたら疲れてしまうよとひまわりの種を添えてみるが、それには目もくれず、ただ走り続けている。カシヤンカシヤンと音がしてドアの方を見たが、何もいなかった。灰色はどんな色だろう。ねずみの毛の色だろうか。曇り空の色だろうか。ロンドンの空を想像してみる。彼らが皮肉家なのは心に太陽が差し込まないからだろうか。いや、それなら京都も晴れていないことになる。では、青空と紅葉と清水寺の風景は嘘か。

鼓動が速くなつて嫌な予感がした。ぎいぎいと古くな



許せないのは私だ。私が許せないのだ。私が私を許さない。喉元にナイフがあった。りんごの皮を剥く時に買ったナイフだった。私はキッチンに立ち尽くしていた。皮膚まであと一ミリ。横に引けば、切れてはいけない血管が切れる。私はそのまま動かなかった。理性を手放して、本能が私を殺しにくるのを待った。生き霊が取り憑いて私の手を動かすのを待った。待ってみたが、その時は永遠に来なかった。テレビをつけると芸能人が喋っていた。人生について語っていた。私はそれを聞き流した。水を飲んで、眠りについた。雨の音が遠くで聞こえた。

D.C.